特集

絵本は「生きる力」を育てる

絵本は、子どもたちにとって親のぬくもりを感じられるもの。
また、子どもたちの「生きる力」を育てます。
園のリーダーが、若手職員や保護者に向けて
絵本について語る際のヒントをお伝えします。

1.はじめに

P10～11
絵本が好きになる子
安見克夫先生
（東京成徳短期大学　教授／板橋富士見幼稚園　園長）

2.事例

❶ P12～13 活動のとらえ方
学校法人安見学園　板橋富士見幼稚園

❷ P14～15 子育て支援／保護者のサークル
学校法人柿沼学園　認定こども園こどもむら

❸ P16～17 保育絵本
学校法人誉学園　つくし幼稚園

3.絵本についてもっと知りたい！

P18～20
脳科学から見た読み聞かせ
泰羅雅登先生
（東京医科歯科大学　教授）

P21
絵本Q&A

認定こども園 こどもむら 「森の図書館」の様子（写真　渡辺 悟）

2 読み聞かせは愛着形成期のスキンシップ

事例❷ 子育て支援 保護者のサークル

学校法人柿沼学園　認定こども園こどもむら

お話をうかがった人／園長 柿沼平太郎先生

コミュニケーションとしての絵本

両親が毎日忙しく、夜、家では食事して寝るだけ。私の幼少期はそんな感じの生活でしたから、母親との思い出で色濃く残っているのは、寝る前に本を読んでもらったことくらいなんです。でも、その時の母の体に包まれるようにして読んでもらって寝たという安心感。そうした体験から、絵本は親子の愛着を築くいちばんのツールではないかと思ったのです。情操教育や言葉の獲得のためではなくて、愛着形成期のスキンシップとしてです。コミュニケーションとして絵本を大事にしたいというのが「森の図書館」のきっかけでした。

0～2歳の「絵本の入り口」に「森の図書館」

ですが、単に絵本を借りる図書館だと子ども連れは入りにくいこともあります。「森の図書館」は子どもが騒いでも泣いてもかまいません。親子がゆったりと過ごせる居場所をイメージして作りました。子育て支援センターと同じ建物にあります。

親に興味がなければ、その子は絵本無しで育ってしまうのかもしれない。でも支援センターの隣なら、ちょっと行けば本があって、子どもが持って来たらお母さんも読んでくれるでしょう。というのも、自宅だと家事に忙しかったりして「あとでね、ビデオ見てて」となってしまいます。

実は、最初は学童期までを対象に考えていたんですが、いざ始めてみると……。大きな子たちが図書館に入ったらワアッとなってしまって、

0歳や1歳の子どもたちがゆったりと本を読んでいる空間が壊れたのです。それなら0～2歳くらいを対象に、親と子の「絵本の入り口」にしようと思うようになりました。

もう1つ、これからの取り組みとして、第1子を妊娠したお母さんも対象にしたいと考えています。産後うつ、子育ての孤立などから悲惨な事故が起きているので、産前からサポートの仕組みを作れないかと。絵本というツールを介して人が集まれる居場所にしたいです。

保護者のサークル「4646さん」が保育者の代わりに

他方、在園している子どもたちは、園の「図書コーナー」を利用しています。「4646さん」という保護者のサークルがありまして、読み聞かせをしてくれて、「えほんだより」も書いてくれます。保育者も毎日、帰りの集まりで読み聞かせをしますが、ほかにもやることがたくさんあるので、なかなか日常的な状況ではないんです。

「4646さん」は、月に2回は来てくれます。集まる子どもは日によって5、6人でも、1人でも構わないんです。多い日には30人くらい参加しますが、活動は自由遊びの時間ですので、外で遊びたい子もいます。1冊読み終わったらほかの遊びに抜ける子、途中から入ってくる子など様々です。集まる子どもが少ない日は膝の上で。イベントとしてではなく、日常的な環境のなかで絵本を読んであげるのです。

「1人でもやる意味あるの?」と疑問をもつ方もいましたが、「この子は何かがあって甘えたくて、そこに「4646さん」がいて本を読んでもらえた。家で読んでもらえていないとしたら大事な経験」と説明しました。

「4646さん」はゴザを持っていまして、敷いたところが読み聞かせのスペースになるんです。その日によって廊下だったり、ホールだったり。メンバーは10人ほど。毎回6人くらい来ますかね。下のお子さんを連れて来てもいいし、仕事をもっていて毎回は来られない方もいますが、それでいいのです、ゆるくて。

いつか愛された記憶として絵本を思い出してほしい。幼少期に絵本を読んでもらった経験は、その後の人生の支えになると思うのです。

（取材・写真撮影　渡辺悟）

P15左下の写真　園提供